
馬鹿者

蒲生潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿者

【Nコード】

N7954A

【作者名】

蒲生潤

【あらすじ】

俺は小学校の時、悪童達と共に悪戯ばかりして、親父から大目玉をくらう事が多かった。そんな馬鹿な俺は大学を卒業し、小学校の教師となった。俺はその学校に真面目に勤めるが、次々と学校で問題が起こる。

「お前はろくでなしの馬鹿者だ」

俺はこの言葉を何度も親父から聞いたかわからない。俺は昔から乱暴者で、何か問題を起こした時には必ずこの言葉を父から聞いたといつてよい。

俺がまだ小学生の時に、家の近くに芋畑があった。その芋畑に悪童達と共に畑の芋を盗みにいった事が昔よくあった。その芋畑の地主が根っからの頑固親父で、畑に少年達が悪戯をしたりすると、烈火の如く怒った。雷が落ちたかと思わせるくらい大きな声で怒鳴りつけるので、俺達の間では「雷じじい」と呼んでいた。今日も雷じじいの芋畑に馴染みの悪童達と共にひっそりと忍びこんだ。仲間の一人の大輔^{だいすけ}が畑の芋を誰が一番多く取れるか競ってみよう、そんな提案をした。競うか競わないか多数決をとった所、賛成という意見が大多数だった。多数決の結果に沿って、皆で競ってみる事にした。

「レディー、ゴー！」

この合図で勝負が始まった。正直最初俺は馬鹿馬鹿しいと思っていたが、以外とおもしろく、夢中になった。いつも慎重に芋を掘り出していく俺だが、今日はなんだか楽しくなって、いつもより荒々しく掘り出していた。突如、雷が落ちたかと思うくらいの轟音が芋畑に鳴り響いた。

「ゴラアアア！」

「でたー、雷じじいがでたぞ！」

心臓がばくばく鳴った。このスリルがたまらなく快感なのだ。土を思いっきり蹴って俺は走りだした。俺はいつぱいの芋を抱えながら猛ダッシュ、力の限り突っ走った。体力がつきはじめ、息も荒くなってきた。もう駄目だ、そう思った時体が宙に浮いた。はっ、と思つて後ろを振り向こうとしたが、力に抑えられて振り向けない。俺は悟った。雷じじいに捕まってしまったんだと。その後俺の親父がきて、こっぴとく叱られた上に、親父の鉄拳を喰らってしまった。生涯忘れる事のできない痛みだった。しかし、俺は芋を一気に15個も盗り、異例の新記録を出す事に成功した。この新記録は自慢するのに大いに役立つた。学校の悪童達の間で、この俺の新記録は一時期話題となった。言い出しつぺの大輔は逃げ出す事には成功したものの、自分の悪事が親に露見し、大輔は親父さんから大目玉をくらった。大輔は声をあげて泣いた。大輔はこれに懲りたらしく、芋畑を荒らす事は二度となかった。

他にも俺は悪い事をたくさんしてきたが、雷じじいの芋畑を荒らすのは格別面白かった。万引きなど小学生がよくやりがちな悪い遊びなどよりも面白かった。芋畑荒らしは、学校で一時期ブームを巻き起こした。この事で親父に何度殴られたかはわからない。ただ、あまりの痛みに泣いた事もあった。親父は恐かった。父は世界の中で一番恐い存在だ。父が怒ると俺の体は縮みあがり、ぶるぶると震えてしまう。そんな恐ろしい父の威厳よりも、遊び心の方がきまつて勝つのだ。

そんな馬鹿な俺も大学を卒業し、教員免許を取得し、教師になる。近藤勇希、二十五歳独身。俺は学生の頃、学問はあまりできる方ではなかったため浪人し、気がつけば二十五歳になっていた。この春、俺の採用が決まった。昔、俺は小学校の教師にまさか自分になるうとは思つてもいなかった。俺は俺ばかり目のかたきにして怒る教師が大嫌いだった。しかし不思議なもので、俺は地元広島で小学

校の教師となるのである。説教する側とされる側とは千差万別である。

俺は採用先の学校に向かうために電車に乗り込んだ。色んなことを考えているうちに、電車は目的地に着き、無心で歩いていると採用先の学校に着いた。採用された「近藤勇希」だと名乗ると、すぐ校長室へ通してくれた。校長は頭髪が白く、丸く太ったおなかを持っている。経済力のある人は大抵この校長の様な体格をしているもんだ。校長の話によると、明日の始業式から勤務してくれとのことだ。俺は6・3組の担任として、この鴨坂小学校（フイクション）です。こんな学校存在しません）に勤める事になった。校長の話しというのは俺の昔からの経験からか、絶対長い話しになるという先入観がある。しかし、存外この校長の話しは短かった。校長は俺に用件を伝えると、もう帰っていいですよと俺にいった。この校長は勤勉な雰囲気を持っているが、意外と話しやすい人かもしれない。

俺は校長の言葉に甘えてアパートに帰る事にした。俺は今のアパートに少しばかり不満がある。アパート自体に不満があるわけではなく、隣人に不満がある。隣人の下坂謙一はセールスマンで、俺にこの商品はどうかしつく聞いてくる。正直迷惑だ。今日就職したばかりの俺に経済的に余裕があるはずがない。しかも下坂が薦める商品は生活には不必要な物ばかりで、ほとんど需要性がない。全くもって迷惑だ。俺は隣人の坂下だけに不満があるわけではない。俺が借りている部屋の真上の住人、黒田誠人にも俺は大変迷惑している。このアパートには風呂がないため、大概の人は銭湯を使用する。しかし、黒田は予想だにもしない行動をとる。黒田は洗面所で体を洗うのだ。このアパートはあまり耐久性はないので、俺の部屋は黒田のせいで雨漏りをしている。本当に黒田だけにはこのアパートから出て行って欲しい。大家に俺は黒田の愚行を訴えた事があるが、実は黒田は大家の甥なので、なんの対処もされていない。こ

このアパートの住人はどいつもこいつも能無しばかりだ。本当に嫌気がさす。

アパートに帰ったのはいいが、この住人達のせいで俺の疲れは取れず、疲れは一向に増すばかりだ。まだ午後の八時だが、俺は明日に備えて早く寝る事にした。布団にしばらく入っていると、心地よい眠りが誘ってきた。ああ、今日はぐっすり寝れそうだな、そう思っていた矢先にインターホンが鳴った。せっかくなつけていたのにと、俺は不快に思ったが、ドアを開けた。ドアを開けたまえには、髪は当分切つてないと思われて、不潔さをただよわせており、げっそりとした貧相な男がたっている。俺はその男をみるなりうんざりした。

「こんばんわ、下坂です。今日はこんな商品をお持ちしました」

このうざったい下坂の言葉が終わらないうちに、俺はドアを思いっきり閉めた。その後も下坂は何か言っているが、俺は下坂と全く取り合わなかった。俺は再び床に着いた。再び寝つけていたが、顔に何か落ちてきている。なんだろうと思つて電気をつけたら、雨漏りしている。俺は大きいため息をついた。

（今度は黒田か……。）

しゃくに障ったので、黒田の部屋に怒鳴り込んだ。インターホンを押すと、黒田がでてきた。黒田は金髪で、周囲があまり関わりたくないような雰囲気をもっている。背は高く、がたいもよく、見るからに強そうだな。俺は背もがたいも圧倒的に黒田に劣っているが、そんな事はない。

「おい、あんた。室内で体を洗うのは控えてもらいたい。はつきり言うがこっちは迷惑だ」

「あ？　うるせんだよ、カス！　しばきまわすぞ！」

黒田の巻き舌での罵倒にも動じず、俺は反問したが、小柄な俺が力でかなうはずもなく、つまみだされた。俺は業を煮やして、ドアを叩きに叩いたが相手にもされず、怒りを抱えたまま自分の部屋に戻った。

結局俺はこのアパートの住人のせいで、心地よく眠ることができずに朝を迎えた。

一（後書き）

未熟な作品を読んでもくださり、誠に感謝しています。もし、お暇であれば評価をお願いします^^ どんどん更新していきますね^^

俺はこのアパートに住んでいる限り、寝不足に悩まされる事になるだろう。好きでこのアパートに住んでいるのではない。俺の経済力ではこの古びたアパートが限界なのだ。俺は眠気を押しのけ、スーツに着替えた。このスーツはまだ全くしわがついていない。今日初めてきるスーツだ。着心地はよい。俺は大きなあくびをして、アパートを出た。駅へ向かっている間に眠気は徐々に和らいでいった。子供の頃はよく学校に遅刻していた。先生に何回も指摘を受けたが、全然改善の余地が見られないので、遅刻に関して廊下に立たされる事は日常茶飯事だった。子供の頃とは違い、おれは学校に遅刻はしない。授業を受ける側ではなく、学問を教える側、教師として学校に通うのだ。遅刻などしている様では教師は務まらない。だから俺は睡眠不足に苦しみながらも朝早く起きたのだ。

目的の駅に着き、しばらくすると電車が到着した。この朝早い時間帯は通勤ラッシュなので、車内はかなり窮屈だった。初めて経験する満員電車だった。俺は痴漢に間違われないように、両腕を常にまっすぐ上に伸ばし、誤解を避けた。なんかとうとう俺も社会人だ、そう思えてきた。そんな小さな感動に浸っていると、電車は目的地に到着した。ここで俺は電車から降りる。ここからはバスでの移動だ。ここから学校までそう遠くはない。二十分程度でつく。俺はバスに乗り換え、鴨坂小学校に到着した。

職員室のドアを開けるのは、案外緊張するものだ。子供の頃はよく職員室で説教されたものだ。俺は大きく息を吸い込み、力強くドアを開け、

「おはようございます、今日から勤務する近藤勇希です」

と、職員室全体に十分聞こえる音量で挨拶した。

禿頭で痩せ気味の男性が、私は教頭を勤めている秋山だと名乗ってきた。この男の印象はなんといつても黒淵の伊達眼鏡だ。見るからに個性的な男だ。教頭が俺の席へと案内してくれた。座り心地はとも良い。子供の頃、^{ガキ}一度でもいいから冷暖房完備の職員室で授業を受けてみたいと思ったものだ。自分の席に座っていると、色んな先生が挨拶してくる。色んな先生が挨拶してくるたびに俺は、

「近藤勇希です、よろしくお願いします」

と何度も同じセリフを吐かなければならない。全くこんなに大勢いるのに、一人ぐらい察してくれてもいいものだ。正直疲れる。俺の他にも当然新任教師がいた。他の新任教師も俺に挨拶しにきた。^{まかへまさし}名を真壁政志とか言った。真壁とは今後同僚という事になる。今年採用された教師は、俺と真壁だけらしい。真壁は体が熊の様に大きく、いかにも強そうだ。

俺は朝会で新任教師の挨拶をすませ、担当の教室、6・3組へ向かった。俺は教室のドアを開け中に入ると、教室内は実ににぎわっていた。俺が着席と十分な音量で命令すると、ぼつりぼつり教室内の声は消え、皆着席した。案外初めて担当するクラスは楽かもしれない。俺は黒板に「近藤勇希」と力強く大きく書いた。

「俺はこのクラスの担任になった近藤勇希だ」

テレビドラマでよく見られるシーンだ。俺はテレビドラマの影響で、昔からこのシーンを演じてみたいと思っていた。今その些細な夢がかなった。俺は出席をとり、俺の自己紹介をすませ、一時間目を難無くこなした。

一時間目が終わり、俺は次の授業の準備のため職員室へ戻った。二時間目が始まるまであと8分もあるが、俺はまだ教師になったばかりで、新鮮な気分なので早めに教室へ向かった。教室の目の前で疑わしい光景に出会った。一人の少年を、3人の少年が取り囲んでいる。俺はここで教師として聞き捨てならない発言を耳にする。

「昨日さあ、僕達ゲーセンいきたいからお金貸してっていったらど？」

と少年が脅し口調でひ弱そうな少年の肩を軽く叩きながら囁いた。

「おいおい、君。まさかお金がない？　はあ？　僕達がつまらない冗談が嫌いって事はしってるだろ？」

膝蹴りが少年のみぞおちに、鈍い音をたてて入った。

「てめえ、先公にちくつたら打ち（ぶち）殺すけえのお。覚悟しとけや。明日金もってこいや！」

俺は少年が蹴られた瞬間、とっさに体が動いた。これは明らかに虐めだ。最初教室に入った時は、このクラスはあまり問題を起こしそうに無く、楽なクラスだと思ったが、大間違いだった。俺が教室を去ったら虐めが起こっている。しかもその虐めは極めて悪質なものだ。かつあげが起こっているのだ。俺はこの目でしかと現場を見たのだから、胸を張って悪童達に説教できる。俺が虐めの現場に割り込むと、少年達は態度を一変させた。

「ああ、先生。僕達神崎君にお金貸したんですよ。でも神崎君なかなか返してくれなくて。僕達、つい頭にきちゃって暴力を振るって

しまったんですよ。ごめんなさい。暴力を振るうのはちょっとやりすぎですよ。ごめんなさい」

卑怯な奴らだ。こいつらは俺に頭を垂らうなづしていたら許されると思っている。俺は一部始終を見ていたんだ。俺は極度の馬鹿ではないのだから、こいつらの言っている事が嘘だという事ぐらいは分かる。俺はこいつらが頭を垂れているのを見ると、腹が煮えきってきた。俺は腹に限界まで力を蓄え、一喝した。

「馬鹿者！」

親父直伝の言葉だ。父がこの言葉で一喝すると、少年のころ体がよく震え上がったものだ。俺は親父ほどではないが、なかなか威風がでたと思う。こんな卑怯な事をしてお前達は恥ずかしくないのか、と怒鳴ると少年達は赤面した。二度とこんな卑劣な事をするなど、俺は少年達に強くいいつけた。虐められていた少年は「神崎大和かみざきやまと」という名で、色白で小柄なおとなしい少年だ。ちょっと虐められやすい風貌だ。神崎に詳しい事情を尋ねると、神崎の目は潤ってきた。何度もどうしたのかと尋ねたが、結局神崎は泣いているばかりで何も語らなかった。

三

神崎が何も語らないので、その後俺はしかたなく授業を進めていたが、何か冷ややかな視線を感じる。さっき上崎を虐めていた三人組が、こちらをみなながら耳打ちをしている。三人の内の一人は、「さなだまさき真田正輝」という悪童だ。こいつは坊主頭で、小学6年生にしてはなかなか背が高く、体格がよい。そのため三人組の中のリーダーに位置する。三人の中で真田が一番不満気にしている。よっぽど俺に説教された事が気に食わなかったのだろう。俺の方を鋭い目でしきりに睨みつけてくる。

あくる日学校に行くと、教室にある俺の机が大変な事になっていた。机の引き出しを開けてみると、中には黄色くにこった液体が入っていた。俺は思わず怒鳴った。

「おい、誰だ！ 俺の机の引き出しにしょんべん出しやがったのは！」

俺の激怒している姿を見て、にやついている三人組がいた。三人組は俺の方に近づいてきて、驚いて見せた。その動作がなんともわざとらしい。

「先生どうしたんですか、これ。大変じゃないですか」

こいつらは俺をからかいにきているのは明白だ。昨日の事から考えても、こいつらが犯人というのは確実と言ってよい。俺は本から短気な性分だから、こいつらの幼稚な行動には腹が立った。しかし証拠もないのに問い詰めても、先生僕達を疑ってるんですか、失望しましたよとかそんな事をいつてくるに違いない。俺は少年の頃万

引きなどの悪事を働いていたが、こんな卑劣なことをやった覚えは無い。最近^{ガキ}子供は卑怯な奴ばかりだ。それにしても齒がゆい奴らだ。本気で殴ってやろうかと思っただが、それは体罰とかなんかで教育委員会の方で問題になってしまう。教師の立場はずいぶん弱いものだ。

俺が黒板に文字を書き込んでいると、頭に何かがとんできた。足の床を見ると、消しゴムの小さなかけらが落ちている。俺は思わず激怒しそうになったが、ぐっつと腹に煮えきるものを抑え込んだ。今消しゴムを俺に投げたのはだれだ、と怒り心頭に問いかけても、先生何言ってるですかと嘲笑をかうに違いない。まあ、犯人はにやついてるあの三人組だろう。俺は相当頭にきているが、俺が怒ったところであいつらは適当にごまかすだろう。

さっきも述べたように、真田は三人組のリーダーだ。真田が指揮し、二人が俺に消しゴムを投げている。真田は俺は何もしていないぜ、と他人事の様に振舞っている。なんと卑劣な手口だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7954a/>

馬鹿者

2010年11月14日15時00分発行